笛は吹くのではない。〝鳴らす〟のだ。

高山（たかやま） 正治（しょうじ）

創始者が直接伝えた重松流（じゅうまりゅう）祭囃子

北永井囃子保存会

毎週月曜日の夜になると、北永井第一集会所からお囃子の音が聞こえてきます。練習をしているのは北永井囃子保存会の皆さん。会長の戸延利雄（とのべとしお）さんをはじめ、約15人が活動しています。

特集を組むにあたり、三芳町内で一番笛が上手な人は誰かと、お囃子連の皆さんに聞くと、口を揃えて「北永井の高山さん」と言います。その高山さんにお話しを伺いました。

「もうお囃子を初めて40年以上になります。ここまで続いて来れたのは、お囃子が持つ〝魅力〟と、川越まつりで演奏してみたいという原動力があるからですね。」

得意とする笛については、「笛は〝吹く〟のではなく、〝鳴らす〟のです。鳴らすことが重要で、時には力強く、時には優しい音色を意識し、共演する太鼓と踊りが一体となったお囃子を演じます。曲が変わる時の合図は〝笛〟で行い、この曲にはこのくだりと決まっています。」

若い時はバンドを組み、ドラムを叩いていたそうで、太鼓も一流の腕前。一度、北永井囃子保存会の演奏を観てはいかがですか。■

北永井のお囃子

北永井の囃子は重松流といわれる流派で、所沢の古谷重松によって編み出された新囃子です。重松流が北永井に伝えられたのは、いつのころかははっきりしませんが、明治元年に北永井に生まれた人が晩年書き残した『思い出かきあつめ』という書き物の中に「私が 15、6 の時。所沢から人形のついた立派な花車を借りてきて 1 里（約 4 ｋｍ）もある村の狭い街道を引き廻ったことがある。所沢町の囃子の指導者重松さんを頼み、毎晩森田甚太郎さんの庭を借りて稽古を始めた。」とあり、重松流の創始者古谷重松から直接伝習を受けたことがわかります。北永井稲荷神社の初たたき（1 月 1 日）･春祈祷（春祭 4 月 12 日）、天王様（7 月 25 日）で奉納のほか、隔年で 11 月 3 日に山車の引き廻しを行い、川越まつりにも参加奉納しています。

↑北永井のお囃子の技術は高く、川越まつりに出場している。隔年で山車の引き廻しが今も行われている。

戦後の荒廃のなか復活させた郷土の囃子

藤久保芸能会

完璧だったことは一度もない。だから続けてこれた。

鈴木（すずき） 修一（しゅういち）

藤久保芸能会の会長として活躍する鈴木修一さんは、町内唯一の酪農家。約40年前にお囃子を始めました。初めて上手に演奏ができたときの喜びが忘れられず今日に至ります。現在は、若い人たちに技術を伝承しながら、自らの技術向上に余念がありません。

また息子の秀幸（ひでゆき）さんもお囃子の魅力に惹きつけられたひとり。

「父の背中を小さいころから見続け、お囃子をすることはごく自然なことでした。笛、太鼓、踊り全てが一つになった時、気持ちが良いです。それがあるからお囃子は楽しいんです。」

父・修一さんにお囃子の魅力、そして今後の展望について伺いました。

「ずっとここまで続けてこれたのは、常に〝もっともっと上手になりたい〟という気持ちがあるからです。自分が鳴らした笛を後で録音して聞くと毎回『がっかり』するんです。この40年間やってきて完璧だったことは一度もありません。だからこそ続けてこれたし、これからもずっと向上心を持って、地元に残る大切な文化を守っていきたいと思います。」■

藤久保のお囃子

神田囃子の流れをくむ藤久保の囃子は、古くより伝えられていましたが、大正３年の祭礼を最後に一旦は途絶えてしまいました。再び藤久保に囃子の音が響くのは戦後の荒廃のまだ癒えきれぬ昭和 26 年のことで、地元の若者たちが、大正年間まで伝えてきた古老に思い起こしてもらい、蘇らせたものです。 伝習を受けた人の話では、「農作業を終わらせた夜や雨の日となると、農家の納屋に集まり青竹に藁をまいた巻藁（まきわら）を叩きながら囃子のリズムを一生懸命覚えました。真剣にやらないとすぐに先輩に見抜かれ、バチで叩かれたりして厳しかったですが、初めて村の人たちの前で披露できたときはうれしかったですね。」とのこと。地元・木宮稲荷の春の祭礼（4 月 20 日）、天王様（7 月 14 日）に奉納されています。

↑藤久保芸能会は現在約 20 人が活動している。一度途絶えた灯をずっと受け継いでいくため、後継者育成を行う。